

暮らしの瓦版

2009年6月号

「木造軸組工法の家」の魅力(9)

【家づくりでも環境対策の優等生】

モノの省エネルギーを判断する時、単に使用する時のエネルギー使用量だけを見て判断していませんか？単に、使用時にエネルギーを使用しない事だけでなく「作る時にエネルギーを排出しすぎないか」「運ぶ時にはどうか」「メンテナンスは」「廃棄は」といった生産から廃棄までの全ての段階においての総合的なエネルギー量で省エネルギーかどうか判断されなければなりません。



では、木造軸組住宅はどうでしょうか。家づくりに必要な材料の生産や運搬にかかるエネルギー量を、木造軸組住宅と、鉄筋コンクリート造(RC造)と、量産の鉄骨造(S造)と比較すると、木造軸組住宅のエネルギー量が、鉄筋コンクリート造や鉄骨造の1/2〜2/3と、少なさが歴然としています。この違いはやはり住宅の要となる柱や梁などの構造材の違いからきています。木造軸組住宅の構造材はもろもろ木質系の材料、鉄筋コンクリート造(RC造)の構造材はコンクリートの材料と鉄鋼系の材料、量産の鉄骨造(S造)の構造材は鉄鋼系の材料です。木質系の材料は鉄やコンクリート材料に比べて、製造にエネルギーがかからなく、尚かつ、材料が軽く、輸送エネルギーがかなり少ない。木造軸組住宅は、環境対策の優等生と言えるのです。

【木は水をおいしくする】

たくさん人が集まる建物では、たくさん水が必要で、そのため、受水槽を設置して、水を供給しています。この水槽は鉄筋コンクリート製、鋼板製、合成樹脂製もありますが、木製のものが活躍しています。木製のものは、昔に設置したものが残っているのではなく、現代でも新設されています。2004年開業の羽田空港第2ターミナルビルなどでは、国内最大級の木製受水槽が設置されています。このような木製のものは、どのようなメリットがあるのでしょうか。まず、木は鋼板と違い錆びず、酸やアルカリにも強い性質があります。木は熱伝導率が小さく、断熱性が高いため、貯蔵している水の冷たさを保つことができます。そして、木材の樹種によっては抗菌作用があるため衛生的です。さらに、槽の一部補修も容易なものです。しかし最大の効果は、「水がおいしく感じる」ことではないでしょうか。おいしい水の決め手は、水の温度です。なぜか、水の温度が生ぬるいとおいしく感じません。水がおいしく感じるのは、体温マイナス25度といわれ、およそ10〜15度の範囲がおいしい水の温度と言われています。木製だからこそ、水道管から配られた水をそのままの水温で保ち、衛生状態もよく、安心して飲むことができるということなのです。

暮らしの梅雨



生活 季節の行事 『嘉祥の儀』

「嘉祥の儀」

嘉祥の儀の起源については諸説があります。その一つに、仁明天皇の848年、6月16日に16の教にちなんで神供を供えて疫病が人体に入らないよう祈誓し、元号を嘉祥に改めたとする説があります。また更に民間に伝わっていくのは、室町から江戸時代で、武家では嘉祥通宝の「嘉通」が「勝」に通じるということで、嘉祥通宝十六枚でお菓子を贈りするなどの縁起を担ぎました。陰暦のこの日は、体調を崩しやすいつきでもあり、災厄をのがれ無事に暮らせるようにとの願いも込められていたのかも知れません。歴史上、嘉祥の儀には様々なエピソードがありました。例えば徳川家康は駿河城で盛大な儀式を行っていました。嘉祥は江戸時代に最も盛んになり、幕府では江戸城の大広間に約2万個の菓子と並べ、將軍から大名・旗本に与えられました。宮中では天皇から臣下へ1升6合の米を賜い、その米を菓子と換えていました。江戸時代には「七嘉祥」といって七種類の菓子がありましたが、現在は嘉祥菓子が七種類が多いようです。なぜ七種類かというと、十六の十を二で表し一と六をたして七としたといわれていますが、幕府と宮中ではお菓子の内容が異なり、十六種のお菓子を使用するなど、教や種類は統一されてはいなかったようです。明治以降、嘉祥の儀がみられなくなり、この日に嘉祥菓子を食べると災いを祓い、幸福を招くといわれ、1979年に全国和菓子協会は6月16日を和菓子の日として設定。この日、赤坂日枝神社で献菓式が行われ、神前でお菓子を2種つくり供えられ、巫女の舞も奉納されます。この献菓式は日枝神社の例祭行事のひとつにもなっています。

【和菓子の歴史】

「菓子」とは元来「菓子」と書き「果」は木の実を意味します。日本史における菓子の初見は奈良時代。米や麦の粉に甘露(蔓系の植物で茎を煮込むと甘い汁が取れる)や水飴・蜂蜜などを混ぜた団子が中国から伝来しましたが「唐菓子」とか「からくだもの」と呼ばれ、果物を模した饅頭のようなものでした。現在のよう「和菓子」が登場するのは室町時代からで、茶道が発達し、茶請けとして考案されたといわれています。さらに「菓子」と「くだもの」を区別するようになったのは江戸時代になってからで、今のよう「和菓子」が生まれ、高級感溢れる日本独自の菓子として菓子職人が作りあげたものなのです。

生活 季節の行事 『衣替え』

「衣替え」

衣替えの習慣は、宮中の行事として始まったものです。しかし、当時は、今と違って旧暦の4月1日と10月1日に行われていました。もともと複雑になったのは、江戸時代の武家社会からで、4月1日から5月4日と、9月1日から8日までは「あわせ」(裏地付きの着物を、5月5日から8月末日までは「かたびら」(裏地なしの単仕立ての着物)を、9月9日から3月末日までは「あわせ」(裏地なしの間に綿を入れた着物の着用が定められ、年4回も衣替えをしていました。衣替えが6月1日と10月1日になったのは明治以降で、学校や官庁、銀行など制服を着用する所では、現在もほとんどが、この日に行われています。なお、南西諸島では温暖な気候の関係で衣替えは毎年5月1日と11月1日に行われています(中学校・高校の場合、新入生は4月から夏服を着用させるところもある)。衣替えは和服の世界では昔の10月から5月までは袴を着用するものが決まりとなっていました。

【衣替えのコツ】

衣類を食べる虫やカビを守るには、衣替えのときの処理が重要です。衣類を食べる虫は雑食のため、繊維だけでなく、そこについてた食べ物のカスやしみを栄養として食い荒らしてしまいます。一度も着たものは必ず洗ってから収納しましょう。カビの原因にもなるのが「湿気」。虫干しをして、湿気をよく取り除きます。収納場所から服を出すのはいつでもOK。しかし収納するのは、晴天が続くと室内の湿度も低くなっているため2〜3日晴天が続いた日にしましょう。そして収納する際は防虫剤をいれます。家庭で使用する防虫剤はパラジクロロベンゼン、ナフタリン、樟脳およびピレスロイド系の四種類あり、これら防虫剤が気化したガスは空気よりも重いため、衣類の上の方に置くことがポイントです。また、違う種類の防虫剤を一緒に使うとしみをくることがありますので、種類違う防虫剤を混ぜて使用するのは避けましょう。昔の人は収納の際、新聞紙を敷いていました。印刷用インクには虫が嫌う成分が含まれているといわれているからで、インクが衣類に移らないように衣類との間に白い紙を敷いて、たんすの引き出しや衣類ケースの下に新聞紙を使用したのです。湿気取りの効果もあるので試してみるのもよいでしょう。

他山の石

「横浜開港 150年」



ペリーが黒船を率いて浦賀にやってきたのは1853年のこと。ペリーは当時鎖国をしていた日本に開国を迫りました。日本は欧米の最新の文化を目のあたりにし、時代の潮流には抗しきれず、ついに長い間の鎖国政策を転換し、1854年3月、「日米和親条約(神奈川条約)」を結び、下田、函館の2港を開港しました。同様に露・英とも和親条約を調印し、鎖国の扉は更に、大きく開かれたのでした。その後、日米和親条約に基づいて来日したアメリカ総領事ハリスにより日米修好通商条約が締結されました。その内容は自由貿易、神奈川(横浜)・長崎・新潟・兵庫の開港と、江戸・大坂の開市、領事裁判権、片務的関税協定、居留地を設ける事など不平等条約でありました(ほぼ同じ内容を、蘭・露・英・仏とも締結)が、これにより1859年6月2日(陰暦)、長崎港とともに横浜港が開港され、今年、開港150年を迎えます。日米修好通商条約の交渉時、ハリスが望んだ開港地の中には、神奈川や横浜の名はありませんでしたが、幕府は神奈川の開港を提案。それは日米和親条約ゆかりの地であり、さらに「江戸に一番近い港で、江戸が外国貿易にむけて開かれる時には必ず重要な場所になるにちがいない」という判断で、ハリスはこの提案を受け入れたと考えられます。但し、ハリスが考えていた神奈川は、現在の神奈川区東神奈川あたりの神奈川宿であり、一方、幕府は横浜を考えていました。幕府としては、外国人と日本人を遠ざけるために交通のひんばんな、東海道の宿場を開港場にすることはさげ、横浜の開港を強く主張し、一方的に横浜に開港場をつくってしまいました。当時の横浜は、港の施設がほとんどない小さな漁村だったので、開港すると、現在の大きな橋の付け根の付近に2か所の波止場がつくられました。そしてこの開港によって、それまで小さな村だった横浜は、海外の窓口として国内外から技術・文化・人が集まるようになり、港を中心として発展を続け、現在の大都市横浜が築かれたのでした。



キタ——(∇)——ツ!!モト

修繕 リフォームから新築工事の建物の事
優良土地活用から物件探索の土地の事

北本建設株式会社

埼玉県北本市古市場3-131

TEL: 048-591-1234

URL: <http://kitamoto.net/kitaken/>

FAX: 048-591-0019



暮らしのカレンダー6月 ■水無月、弥涼暮月、風待月、建未月、水月、涼暮月、蝉月、田無月、常夏月、鳴雷月

1日 衣替え	10日 時の記念日	21日 父の日/夏至
5日 芒種	11日 入梅	

【6月】日本では、旧暦の6月を水無月と呼んでおり、その由来は文字通り、梅雨明けで水が涸れてなくなる月であると解釈されることが多いが、田植が終わって田んぼに水を張る必要のある月[水張月][水月]であるとする説も有力。英語名であるJuneはローマ神話のジュピターの妻ジュノーから取られました。ジュノーが結婚生活の守護神であることから、6月に結婚式を挙げる花嫁を「ジュノー・ブライド」と呼び、この月に結婚をすると幸せになれるといわれます。